「総合人間学」構築のために (試論・その 2)
ホモ・サピエンスとホモ・デウス、人新世（アントロポセン）の人間存在とは？

For the Purpose of Building a “Synthetic Anthropology”
[Tentative essay, part2]:
What is the Position of Human Beings in Anthropocene?
Homo sapiens and Homo deus

古沢広祐
FURUSAWA, Koyu

1.　はじめに

前稿（試論・その 1）では、現代の人間社会が直面する 3 つの課題、①生存環境の危機、②社会・経済的編成の危機、③実存的危機を示すとともに、その問題設定と連動して、自然界における人間の位置と存在様式（時間軸・空間軸）に関して三層図式による総合的な把握を示した。

本稿では、自然界の中の人類という種すなわちヒトとしての特性について、自然システムから自立的に展開する社会・文化的存在（社会システム）という特徴を中心に考察する。そこでは、人間という存在について、時間的・空間的な座標軸のもとで客観視するメタ認識の獲得という特性（認知革命）の上に、自己を含めて操作対象として自然と人間自身を再編・構築していく存在がもつ大きな可能性と不安定性（可変的・自己創造的存在）について論じる。

本稿の論考の手がかりとしては、地質年代の表記で論点になっている人新世（アントロポセン）をめぐる議論、最近話題となったユヴァル・ノア・ハラリ著『サピエンス全史（上・下)』と続編の『ホモ・デウス（上・下)』とをとりあげ、批判的に検討しつつ人間存在のとらえ方とその未来について考察していく。

2. 人新世（アントロポセン）が提起する人間存在をめぐる議論

人新世（Anthropocene）という言葉は、オゾンホールの研究でノーベル化学賞を受賞したパウル・クルッツェン（Paul Crutzen）が 2002 年に新造語として提唱したもので、環境問題や人類文明を論じる際のキーワードとして最近さまざまな場面において多用されている。1 万 1700 年前に始まった新生代第四紀の完新世の時代において、現生人類（ホモ・サピエンス）の活動が活発化して、急激な変化が地質年代的にも引き起こされるようになった近年の事態への問題提起であった。地球史的な地質年代のスケールでも、人類という存在とその活動が顕著に影響力を与えている事態を再認識する動きである。ただし、新用語が地球の地質年代区分として正式に認められるかどうかは、複数の国際的学術団体による承認が必要なことから数年先の結論となりそうである（吉川 2017）。

多少気になる点は、完新世という時代は最終氷期を経て地球の気候が温暖化してきた時期であり、それは人類が狩猟採集生活から定住農耕や牧畜生活を始めることで世界大に繁栄をとげていく時期に重なっていることである。人類が農耕時代に入り都市を形成し発展していく時期がまさに完新世の時代であり、その地質年代を土台とした上で、独自の影響力が人類活動によって新たに生じている点をどう評価するかは大きな論点ではないかと思われる。さらには影響力の内容として、とくに産業革命や科学技術文明、あるいは市場経済・資本主義・社会経済システムの創出といった人類の歴史を画する出来事をどう考えて位置づけるかは大きな問題である。

これまでの完新世の時代と明確に区別できる地質学的証拠としては、1950 年前後を境にして幾つも生じてきた大変化（Great Acceleration）において提示されている。証拠の筆頭に挙げられるのが核開発（核爆弾、原子力発電）によるプルトニウムなどの放射性物質であるが、それ以外にも化石資源利用による二酸化炭素の濃度変化、成層圏のオゾン濃度減少、海洋の酸性化、地表面の大幅な改変（森林減少、農地・都市の拡大）、生物種の絶滅などが示されている。

筆者としては、幾つもの大変化が指標で明示された点は参考になるが、地質時代の表記とするかどうか以上に重要なことは、地球史あるいは生物進化の経過における人間存在をどう評価し認識するかではないかと考える。人間の活動を歴史的スケールにおいて理解する点では、拙著『地球文明ビジョン』で紹介した人類の活動規模を示し

た図が端的に表現しているのでここに再掲する（図 1 ）（古沢 1995）。横軸のラインは百年単位での推移を示しており、4 つの指標（人口、エネルギー消費、情報量、交通）の活動規模が長年のゆっくりとした流れから急拡大する様子が一目瞭然でわかる。たとえば人口数では，1900 年時点で 16 億人規模が 2000 年で約 60 億人規模となり百年間に 4 倍近い増加をみせている。

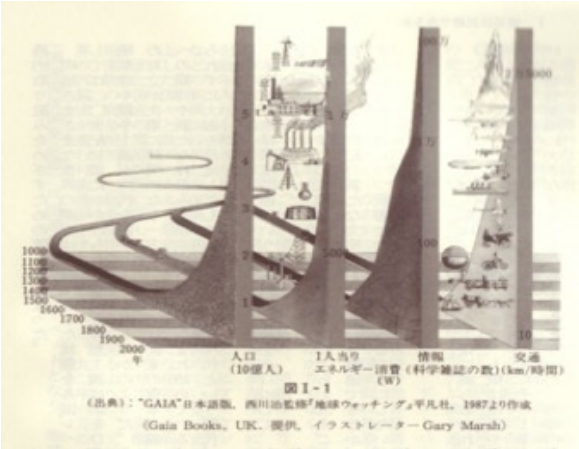

図 1: 人類活動の変遷
出所：拙著『地球文明ビジョン』P.10 掲載図

地球表面は、約 7 割が海域で約 3 割を陸地が占めている。陸地の 3 分の 1 強が農業用地として利用されており（果樹や牧草地を含む）、それ以外は森林地域と荒地（砂漠や極地）が各々約 3 分の 1 弱を占めている。森林といっても大半は人間の影響下にあり、狩猟採取、木材、燃料、紙の原料などを得る場所として利用されて、手つかずの原生林はごくわずかである。海洋もほとんどの海域は漁業として利用されており、近年では漁獲量が頭打ちとなり資源枯渇が心配されている状況にある。そして人類 74 億人を養う家畜として、牛が 15 億頭、羊が 12 億頭、山羊と豚が 10 億頭ずつ、鶏が 215 億羽ほど飼われている（2015 年）。

私たちの日常の食生活を見てもわかる通り、世界中の土地でつくられた食料や飼料が世界大で輸送され、加工・販売される仕組みが成立しているのである。普通の多くの生物がその生息域内で食料を獲得している状況と比較するならば、人間は地球上の全域から食料を調達している特別な存在ということができる。さらに図 1 に示されているように、食料以上に各種地下資源を採取して大量のエネルギーを消費しており、

近年は地球大気圏を離脱して月面への進出、さらには火星など惑星間への移動まで実現させる勢いを見せている。その点では、人新世という時代が幕開けしたという見解は傾聴に値する。こうした人類活動の飛躍的拡大の経緯と危機的な事態に関しては、グローバリゼーションの３つの波として、すでに『総合人間学 10』でも論じた（古沢 2016）。

3.　地質学的議論から社会・文化・人間論への展開

最近の人新世をめぐる議論と応用的展開は多岐にわたっており、地質学から生態学や環境科学を含み込む自然科学分野にとどまらず、人類学、地理学、哲学、歴史学、文化理論などの社会科学、そしてフェミニズム、人文学、ポップカルチャー、環境アートに至るまで広範な影響力を及ぼしつつある。その中でも注目しておきたいのは社会科学や人文科学における展開であり、人間による環境改変について、生物種レベルでの議論の枠を超えて歴史的、文化的、政治的な文脈において論じる議論が広がっている。そこでは人新世の開始を新石器時代からと見たり、産業革命を重要な契機とみる見方、そして資本主義的な社会発展と産業編成こそ画期とみる「資本新世」という造語まで提起されている状況がある（イェンセン 2017、ボヌイユ・フレソズ 2018）。

それらを詳細に論じる余裕はないが、ここではとくに「人新世、資本新世、植民新世、クトゥルー新世」（ハラウェイ 2017）を参考にして論考をすすめたい。人新世から派生して生まれる用語に関して論じているダナ・ハラウェイは、生物学から科学史・科学技術論に転じて文化批評、ジェンダー・フェミニズム論を展開する気鋭の思想家で、とくに「サイボーグ宣言」（1985 年）からサイボーグ・フェミニズムの提唱者として知られており、ポストヒューマンをめぐる議論に一石を投じている（カリフォルニア州立大学サンタクルス校名誉教授）。人新世に対する興味深い指摘は、人一般を一括りで議論するのではなく、価値増殖（資本蓄積）の拡大が地球全体を覆いつくす「資本新世」というとらえ方や、工場式畜産や広大なモノカルチャー（単一栽培）がグローバルに展開して未曽有の自然収奪を引き起こしていると見る「植民新世」などという見方を重視している点である。人新世の中身に、より踏み込んだ問題分析が必要だとして、さらなる新しい造語として「クトゥルー新世」という用語まで提起している。

ハラウェイの議論は、すでに「サイボーグ宣言」「伴侶種宣言」などの提起にみられるように、機械と生物のハイブリッドや動物と人間の共生系（犬、猫など伴侶種）な

ど、境界を超える在り方から既成の価値観や権威性を問い直し、二項対立的な枠組みを打破していく思考法に特徴がある（ハラウエイ 2013）。サイボーグの論点としては、そこに男女の性差から生／死、生物／物質、自然／文化、肉体／精神、公的／私的、テクノロジー、搾取や抑圧、階級など様々な既成概念を超える契機としてサイボーグを論じているのである。「クトゥルー新世」のクトゥルーとは、正体のわからない怪物的生き物、空間や時間（過去・現在・未来）をまたいで活動する可変的存在（想像概念）として示されており、人新世は一種の境界的出来事ないし断絶的事態にすぎず、「クトゥルー新世」はその先を見ようとして提起されているのである（ハラウェイ 2017）。かなり抽象度の高い議論であり、理解しにくいところもあるが人間や生物という存在への挑戦的な在り方を追求している論考として注目したい。

ハラウエイの視点は、上述したようにこれまでは当然のこととして設定していた概念の問い直しであり、枠組みの設定自体を変えていくことで新たな視点を獲得しようとしている点である。その点では、次に取り上げるユヴァル・ノア・ハラリの視点に多少とも通じるところがあるので、次に、ハラリのホモ・サピエンスからホモ・デウスに関する論点について見ていきたい。

図 2:（書籍の写真は筆者撮影）

4. ホモ・サピエンスとホモ・デウス

従来の枠組みを超えようとする動きとしては、宇宙史的な視点を踏まえて人間を位置づけ直すビッグ・ヒストリーの提起や、世界史を各国の歴史からではなく広範な相

互関係や総合的視点でとらえるグローバル・ヒストリーの試みが盛んになっている。そうした潮流の一つとして世界的ベストセラーとなった書籍に、ハラリの『サピエンス全史』があり続編ともいえる『ホモ・デウス』がある（ハラリ 2016、2018）。著者はイスラエルのヘブライ大学で歴史学を教えている気鋭の学者だが、広範な知識を駆使し、随所に知的好奇心をくすぐるエピソード（小話）を挿入しながら、独自の視点から人類の歩みを整理して、人類の行く末を大胆に展望したのだった。詳細は、書籍に譲るとして、大きな注目点はホモ・サピエンスという存在を巨視的視点で読み解いて、かつ未来の展望を大胆に描き出した点である。

人新世をめぐる議論とも通じるが、とくにホモ・サピエンスが地球上で特異的繁栄をとげてきた経緯について人間中心主義の成果である点を強調しつつ、その成果自体が人間という存在を変えてしまう可能性を明快に示した。その動向を、ポスト・ヒューマン的な存在になると見通して、全能の神を表わすラテン語のデウスをあてた用語としてホモ・デウスという造語で提示したのだった。

人間中心主義が生み出した多くの成果の最終的帰結として、全ての情報を掌握して操作していく能力の肥大化の極点において、ホモ・デウスが想定されている。それは、従来の自然界の遺伝的進化現象において達成されるのではなく、人間自身が自らを修飾ないしは造り変えていく独自の発展形態として生じるというのである。人間社会の営みや自然界について、次第に全てを掌握していく高度知識社会、その土台を成すデータ中心主義が飛躍的に発展することで、人間自身を変えていくと予想する。すなわち、より精緻な知識とデータの集積が進み、とくに人工知能の飛躍的進歩が相乗的発展をとげていく過程で、そうした状態に適応しながら新たな存在が形成されていくのである。いわば超能力を獲得していく人間の出現を予想しているのだが、それはけっして楽観的未来ではなく、人間自身の存在理由を揺るがす悪夢になる可能性もあるという。

未来の人間像の具体的な姿を描いているわけではないが、近未来的には、人間・機械系のようなサイボーグ的存在かもしれないし、ゲノム編集技術による遺伝子改変が適用された存在として出現するかもしれない。いずれにしても従来のホモ・サピエンスからは大きく逸脱した人間存在が想定されうるのである。すでに現代のデジタル社会においても、若者を中心にスマホ中毒やネット依存症など深刻な症例が顕在化していることを思えば、未来の人間のあり方としては、あながち荒唐無稽な想定ではないだろう。

こうした考え方は、AI 革命でのシンギュラリティ（特異点：人間の知的能力を AI が凌駕する近未来予測）やロボット技術、ゲノム編集などの技術革新を是とする時代風潮においては、親和性がある問題提起である。とくに経済界の重鎮の人々からは、著作への高い評価が寄せられている。本稿では、ハラリの著作内容について細かく論評するのではなく、こうした人類の未来史観的な視点をどう受け止めるか、とくに気になる論点を指摘するにとどめたい。

5. 人間をとらえる多角的視点と人間存在の根幹のゆらぎ

本稿は短いエッセイで、多くを論じる余裕はないことから、以下では簡潔に要点のみを示す。とくにハラリのホモ・デウスという設定は、細かい論点に入らずに全体展望として見るならば、起こりえる近未来の予測としては興味深いものである。しかしながら、ホモ・デウスという存在自体については、実はそのまま現代世界の実相を映し出したものとして考えると分かりやすい。

すなわち、現代の超人的存在としては、急速な経済のグローバル化を背景に登場しているスーパーリッチと呼ばれる人々が、ホモ・デウスそのものではないだろうか。オックスファムのレポート「1％のための経済」（オックスファム 2017）が明らかにした、世界トップ 8 人が所有する総資産額が世界人口の下から半分の貧しい人々（36 億人）の総資産額に匹敵しているといった状況は、それを象徴的に示している。こうしたスーパーリッチ族は、巨額の資産を土台に超一流エリートを多数雇い入れて、世界中の情報データを集積・管理しながら、企業経営、資産運用（投資）、税金対策（タックスヘイブンの活用）を行い、プライベートジェットで世界を飛び回っている。まさにその姿はホモ・デウス的な存在そのものと言ってよいだろう。

変容していく人間の姿を、象徴的な存在「ホモ・デウス」として思い描くことは一見してわかりやすい。しかしながら、人間をとらえる視点としては、資本新世といった用語で示されるような経済活動（資本の拡大増殖運動）が創り出すダイナミックな構成体としてとらえる批判的視点の方がより重要だと思われる。人間存在とは、各種制度など経済・社会・文化システムに組み込まれて成り立つ超有機体のような姿として相対化してとらえる視点が重要ではないかと思われる。さまざまな論点があり、ハラウエイが提起した従来の枠組みを打破する視点などについても、検討すべき課題は多く残されている。

最後に、世界認識に関して、私なりに重要だと考えている視点を示して本稿を閉じることにしたい。世界を見る基本的な立場としては、認識の限界性（３つの不確定性）について自覚することが重要だと考える。それは、前回の人間存在の 3 層構造に示した基本的な成り立ち方ともつながる見方である。

すなわち、一つ目は自然科学の分野で示された不確定性原理（物理学・素粒子論）として実体の不確定性である（自然的存在）。二つ目は、人間が自ら創り出している社会形成的存在（経済を含む）としての不確定性である。人間は、個人と他者との相互関係による集合・社会的な存在であり、相互影響しつつ疎外的な要素を抱えた不確定な存在である（社会的存在）。三つ目は、人間の認知・認識上の限界としての不確定性である（世界内存在、個的・共同主観的な世界における存在）。

わかりやすく別な言葉で言いかえてみよう。定めがたい可塑性と可能性に富んだ未知なる存在として、日々、歴史的に、進化史的に存在を確定しながら生きているのが我々人間である。赤ん坊から成人に育つ過程で、人間はその人格や精神世界をつくりあげてきたのだが、それ自体が安定というより形成途上のものである。実際上、時には精神疾患を隣り合わせにもった不安定で可変的な存在なのである。不確定の中で何を確定していくのか、日々問われつつ、それなりの「自由」において今を生きていると言ってもよい。

人間の存在様式については、詳細には 3 層の構成体の姿を基盤において改めて検討していく必要を感じており、今後の論考において追究していきたい。尚、本論考は 2018 年 12 月 15 日の研究談話会（第 1 回研究会）での報告と重なっており、研究談話会での議論をふまえて改訂したものである。

注

アントロポセンの訳語には、人新世のほか人類世も使われており、ネット上で解説動画が公開されている。「ようこそ人類世へ」（日本語吹替版）：http://www.futureearth.org/asiacentre/ja/welcome-anthropocene

参考情報として宇宙・人類史を 1 分動画で表現した作品「Our story in 1 minute」も公開されている。https://www.youtube.com/watch?v=ZSt9tm3RoUU

放送大学の 2019 年度特別番組（TV、クロス討論）「“人新世” 時代の人類と地球の未来〜人類学からの問い（前編・後編）」も参考になる。

参考文献

C.B. イェンセン（2017）「地球を考える―「人新世」における新しい学問分野の連携に向けて」藤田周訳『現代思想 2017 年 12 月号　特集=人新世』青土社

オックスファム (2017)「99% のための経済」（格差に関する 2017 年版報告書）日本語版ニュース（http://oxfam.jp/news/cat/press/201799.html）、最新版（2019）によれば「最富裕者 26 人の資産が下位半分（38 億人）に匹敵」（朝日新聞デジタルニュース 2019 年 1 月 22 日：https://www.asahi.com/articles/ASM1Q3PGGM1QUHBI00G.html）

D. ハラウェイ（2013）『犬と人が出会うとき：異種協働のポリティクス』高橋さきの訳、青土社

D. ハラウェイ（2017）「人新世、資本新世、植民新世、クトゥルー新世」高橋さきの訳『現代思想 2017 年 12 月号　特集=人新世』青土社

Y.N. ハラリ（2016）『サピエンス全史：文明の構造と人類の幸福』柴田裕之訳、河出書房新社

Y.N. ハラリ（2018）『ホモ・デウス：テクノロジーとサピエンスの未来』柴田裕之訳、河出書房新社

古沢広祐（1996）『地球文明ビジョン―「環境」が語る脱成長社会』日本放送出版協会

古沢広祐（2016）「人類社会の未来を問う―危機的世界を見通すために」総合人間学会編『総合人間学 10』学文社

C. ボヌイユ, J.B. フレソズ (2018)『人新世とは何か ―〈地球と人類の時代〉の思想史』野坂しおり訳、青土社

吉川浩満（2017）「人新世（アントロポセン）における人間とはどのような存在ですか？」10 ＋ 1website、http://10plus1.jp/monthly/2017/01/issue-09.php（サイト最終閲覧日、2019 年 3 月 31 日）

[ふるさわ　こうゆう／國學院大学／持続可能社会論]